

北中理事長メッセージ



2022年も半年が過ぎようとしています。今回のニュースレターでは、新5か年戦略（2021-2025年）の根幹である環境再生農業（Regenerative Agriculture: RA）を中心に、持続可能な農業の推進に係るササカワ・アフリカ財団（SAA）の取り組みを皆様にご紹介します。

環境再生型農業（RA）は、土壌の健全性を回復させるとともに、気候変動緩和に資する手法として欧米を中心に注目を集めています。土壌に有機物を投入することで微生物を活性化し、土中に炭素を貯留させ、土壌構造を改善することで保水力を高め、浸食や表土飛散を抑制し、土壌の健全性を促進します。しかし、アフリカ農村部を取り巻く環境は一様ではなく、先進国のRAの概念をそのままアフリカに適用することはできません。例えば、アフリカの小規模農家の平均的な耕作面積は米国に比べはるかに小さく、1ヘクタールあたりの肥料使用量は10分の1以下です。土壌劣化の度合いも非常に深刻です。さらに、灌漑へのアクセスは限られているだけでなく、作物残渣は燃料や飼料として利用されるため、マルチングのために十分な量を確保することが難しいのです。

このような状況の中、SAAは、環境再生型農業を主軸とし、環境保全型農業（最小耕起、マルチング、輪作・間作）と土壌肥沃度の統合的管理のアプローチを組み合わせ、サブサハラ・アフリカで持続可能で強靱な農業システムを確立することを目指しています。それは、土壌の健全性を回復し、農業生産性を向上させるとともに、農地から排出される温室効果ガスを削減、延いては気候変

動の緩和に貢献するものです。「Walking with the Farmer (農家と共に歩む)」をスローガンに、如何なる時もアフリカの農家に寄り添い、現地のニーズに適うアプローチを確立していきます。

また、小規模農家やパートナーから学ぶ姿勢を忘れず、彼らと協力してアフリカの農業変容を推進していきます。道のりは決して平坦ではありませんが、あらゆるパートナーやアフリカ農家とともに、この壮大な目標を成功に導きたいと強く決意しています。

理事長 北中 真人

今月の PICK UP

SAA 視察チーム、ブルキナファソとガーナで RA 技術のヒントを得る



2022年3月、SAAの視察チームはブルキナファソとガーナを訪れ、環境再生型農業に資する様々な技術を視察・調査しました。まず、一行が訪れたのは、ブルキナファソ産のリン鉱石を活用した国産リン肥料を生産する工場です。このプロジェクトは、日本の研究者がJICA（国際

協力機構) および JIRCAS (国際農林水産業研究センター) と共同で行っており、高価な化学肥料の輸入から脱却し、肥料の地産地消への転換を支援しています。

次に、JIRCAS が支援する耕地内休閒システムを視察しました。耕地内に 5m の休閒帯を 30～60m 間隔で設置することで、休閒帯に生えた雑草が風食を抑制し、かつ、土壌養分の蓄積を促すシステムです。施肥はほとんど必要ありません。この技術は、風食被害が後を絶たない西アフリカ・サヘル地域の砂漠化の進行を抑えるために開発されたものです。

その後、一行は、ブルキナファソの首都ワガドゥグ近郊にある [ソニーコンピュータサイエンス研究所社](#) が支援するシネコカルチャー・プロジェクト (Centre African de Recherche et de Formation en Synécoculture : CARFS) を視察しました。シネコカルチャー (協生農法) とは、不耕起、無施肥、無農薬、種と苗以外持ち込まないという条件で、有用植物を高密度に混植し、人工的に生態系を作り出す農法です。同農法は、自然のプロセスに倣い、食料、薬、害虫防除など、あらゆるニーズに応える生物学的に多様なガーデンを構築するという点で、SAA の環境再生型農業の原則に一致することが確認できました。

最後に、ガーナ、クマシ地方にあるアフリカ不耕起農業センター (Center for No-Till Agriculture: CNTA) を訪問し、環境保全型農業 (Conservation Agriculture: CA) の 3 原則 (不耕起、マルチング、輪作・間作) を実証する圃場を見学しました。同センターは、展示圃場を通して、害虫、土壌肥沃度、作物の統合的管理の関する技術普及に取り組んでいます。

現地からの声

「間作や堆肥利用などの RA 技術の導入で、収穫量が改善しました」



ナイジェリア北部ゴンベ州アンタワラムのイリヤ・アダムさんとナサラワ州ケフィのアルハジ・ヤハヤ・アブバカルさんは、毎年同じ作物（主に穀物）を栽培するという現地で一般的な農業を繰り返していた結果、収穫量の減少に悩まされていました。原因の一つは、作物の残渣がすべて取り除かれ、有機物が土壌に十分に施されていなかったことにありました。

ある日、アダムさんは SAA が主催する研修で、穀物と豆類の間作、堆肥の利用といった環境再生型農業に資する改良技術を学び、自身の農地で実践したことをきっかけに、収穫量を増加させることができました。アダムさんは次のように述べます。「肥料が高いと言われた時代は終わるでしょう。化学肥料の代わりに、家庭から出る作物残渣を利用し、有機肥料を生産することができるのですから」。

アブバカルさんは、トウモロコシと大豆の間作技術の導入により、肥料や農薬への負担が大きく軽減したと述べました。「私は長年トウモロコシを栽培していますが、毎年、高価な化学肥料を購入するのに苦労していました。しかし、SAAが推奨するトウモロコシと大豆の間作システムを採用したことで、化学肥料の使用量が減りました。化学肥料を減らしても、トウモロコシに大きな穂軸が付き、感激しています。」二人は、SAAの取り組みが農村コミュニティに与えた影響について、高く評価しています。

土壌改良技術は暮らしを豊かにする ～エチオピア、ソラ兄弟のストーリー～



2019年、SAAは、エチオピア、オロミア州アナソラ地区ラヤボダの農村にてデモンストレーション圃場を設置しました。土地を提供したのは、村に住む兄弟、デベソ・ソラさん（57歳）とゲメダ・ソラさん（47歳）兄弟です。そしてSAAは、この圃場で、減耕起、正条植え、高収量の改良種子の採用（穀類と豆類）、適量の施肥、土壌肥沃度と害虫の統合的管理などを実践し、農家研修を実施しました。

2021年、SAAの研修を受けたラヤボダの農家たちは、自分たちで、継続的に農業生産方法を検討・改良するまでに成長しました。「SAAのおかげで、私たちは農業技術の向上と実践に目を向けるようになりました」「自分たちの農法の何を改善すればよいのか分かるようになりました」とソラ兄弟は、研修の効果について評価します。

さらに、「私たちは広大な農地を耕していましたが、改良農業技術についての知識がなかったため生産性は低く、生活は苦しい状況でした。SAAの研修で得た新たな知識と技術に感謝しています」と述べました。

ソラ兄弟は、研修に参加した農家に対し、学んだスキルを自分の農場で忠実に実行し、自分たちの農業を変革していくよう促しています。フィールドデーに参加したり、試験圃場を見学したりするだけで満足せず、学んだことを自分の農場で実践することが、よりよい生活を手に入れる近道だと考えているのです。

環境再生型農業の推進に向けた取り組み

マリの農家が家庭ごみを堆肥にする技術を学ぶ



SAA マリ事務所は、マリ西部のクリコロ州にて、農業普及員 10 人と農家を対象に、地元の資材を用いた堆肥作り研修を実施しました。

研修は 2022 年 4 月 22 日、モンツォンブレナ ポストハーベスト&商業取引センター (PHTC) で行われ、農家たちは、堆肥作りに関する理論と実践方法を学びました。研修を受講した農家は、堆肥を集中的に使用することで、化学肥料の使用を大幅に減らすことができ、その結果、生産コストを削減することができると学びました。

今後は、石堤、最小耕起、輪作などの土壌保全技術についても研修を行う予定です。

エチオピアの農家、SAA の研修で幅広い RA 技術を習得



SAA エチオピア事務所は、環境再生型農業、栄養に配慮した農業、農業普及に関する研修を実施し、エチオピア 5 地区から 111 人（女性 86 人）が参加しました。

3 日間の研修では、持続可能な環境再生型農業、土壌肥沃度の統合的管理、クライメート・スマート・アグリカルチャー、作物の多様化、環境保全農業、種子のプライミング（発芽促進処理）、農業普及アドバイザーサービス、栄養に配慮した農業、ポストハーベストと貯蔵技術、市場志向農業、e-エクステンションなどが講義され、参加者は、RA に資する幅広い知識を学びました。

特に注目されたのは、耕起を基本とする慣行農法から脱却し、有機物の維持と土壌の健全性向上に重点を置いた農法に変容してアプローチです。研修では、農地を頻繁に耕すことは、土壌有機物の減少や土壌侵食を促進するだけでなく、土壌からの温室効果ガスの排出を促し、気候変動に悪影響を及ぼすことが説明されました。

SAA ナイジェリア事務所、環境再生型農業 (RA) の取り組みを加速



SAA ナイジェリア事務所は、2022年、間作/輪作、作物多様化、堆肥の生産と利用、不耕起/最小耕起などの土壌改良技術を各農村で実証するため、国内429カ所にRA試験圃場を設置する取り組みを行っています。RA技術の普及により、農地の生産性を持続的に向上させることが目的です。

SAAは、昨年、クライメイト・スマート・ビレッジの取り組みと並行し、ナイジェリア北部ジガワ州にRA試験圃場を116カ所設置。尿素肥料の使用、堆肥の製造と使用、混合農業、灌漑

園芸作物、早生品種の栽培など、気候変動への適応と緩和技術がデモンストレーションされ、成功裏に終わりました。

同時に、SAAは、合計115人（女性22人）の農業普及員と地域推進員を対象に、環境保全型農業や土壌肥沃度の統合的管理について研修を実施しました。研修を受講した普及員らは、学んだ知識と技術を460のコミュニティで1万1,500人の農家に普及。土壌の透水性や通気性、保水性や保肥性、生物多様性、有機物含有量などの向上に資する技術を伝播しました。

SAA ウガンダ事務所、タイムリーな農業投入財の配布で早期種まきに貢献



2022年の植え付けシーズンを前に、SAA ウガンダ事務所は、農家に対し、農法デモンストレーションと農業投入財の配布を行うプロジェクトを実施しました。

プロジェクトの一環として、農業普及サービスが行き届いていない農村コミュニティへの教育拡大、改良技術と農法の普及を目的とし、農家学習プラットフォームを設立。試験圃場の設立、種子増殖、種子プライミングの技術普及に力を入れています。

また、噴霧器、測定ロープ、巻尺、ゴム長靴などの備品や、種子、尿素、リン酸二アンモニウム (DAP)、殺虫剤などのキットが各地区 (コレ、オトゥケ、オヤム、ナカセケ、ムベンデ、キボガ) のコーディネーターや農業普及員に配布されました。

今回、種子などの農業投入財を適切な時期に配布することで、農家の適切な播種・慣行を促すことが示されました。

イベント

SAA 東京本部、ガーナ共和国ケープコースト大学を訪問



3月15日～16日、SAA 東京本部のスタッフがガーナのケープコースト大学を訪問し、大学スタッフや学生、近隣農家と交流しました。

ケープコースト大学は、中堅農業普及員を対象とした学士号取得プログラム「笹川アフリカ農業普及教育基金 (SAFE)」を1993年、最初に開始した大学です。大学を歩けば、ササカワ・

ロード、ササカワ・センター、ササカワ・レストランなど「ササカワ (Sasakawa)」の名前が次々と目に入りました。遠く離れたガーナの地に「ササカワ」の功績が世代を超えて受け継がれていることに身の引き締まる思いがしました。

現在までに、600人以上が同プログラムを卒業し、ガーナ食糧農業省の普及員として活躍しています。

エチオピアの若手農家グループ、事業開発の手ごたえをつかむ



2022年2月、SAA エチオピア事務所は、オロミア州中央で、農業ビジネスに関する4日間の研修を実施しました。同研修は、特に農家グループの若者を対象に、ビジネススキルの向上を目的に行われました。

アナ・ソラ、ネグレ・アルシ、アンガチャの3地区から合計60人(女性18人)の農家が参加し、市場調査、事業計画の策定、収益性分析など、さまざまな事業開発・経営スキルについて学びました。

参加したグループは、農業が収益性のあるビジネスとして運営できることを確認し、所得を最大化するには、果物の生産や種子増殖の取り組みなど、事業の多様化が必要であることを学びました。

SAA ウガンダ事務所、農業パートナー賞を受賞



2022年4月20日、首都カンパラにて、ウガンダ農業賞表彰式「発展のための農業・ビジネス・イノベーション」が開催され、SAA ウガンダ事務所が「農業パートナー賞 2021 (2021 Agri-partners Recognition Award)」を受賞しました。この賞は、イノベーションを通じて農業の価値向上に努めた個人/団体の功績をたたえ、表彰されます。

SAA ウガンダのジョセフ・ベンバ副所長は、「ウガンダ農業畜産水産省、日本財団、バリューチェーン関係者、開発パートナー、小規模農家、そしてすべての SAA スタッフにこの賞を捧げる。私たちは、ウガンダとアフリカの農民たちとともに歩み続けることを約束します」と述べました。

また、SAA が設立を支援した Zirowe Agali Awamu ビジネス研修協会ワンストップセンター (One Stop Center Association: OSCA) の代表を務めるゴッドフリー・マヤンバラさんは、セ

ンターを代表して、「最優秀農家グループ賞 (Best Farmer Organization Award)」を受賞しました。同センターは、SAA が支援している OSCA の中で、最も成功している組織の 1 つです。